





「どうして引っ越しをしたの？」  
 と、母に聞きました。母の口から出た言葉は  
 意外なものでした。  
 「●●君のお父さんは、借金の連帯保証人に  
 なったのよ。お金を借りた人が逃げて、連帯  
 保証人になった●●君のお父さんに借金の返  
 済義務が生じたの。その借金を返済するため  
 に、家と土地、預貯金、家財道具を全部差し  
 押さえられたのよ。しばらくの間、●●君の  
 おじいちゃんのとこで生活するらしいわ」  
 そう言うと、あわただしく夕食の準備を始め  
 ました。  
 わたしは部屋に戻り、ベッドに横たわりま  
 した。枕元には『走れメロス』がありました。  
 読書感想文を書くために読んだ本でした。  
 『走れメロス』は、友情とはすばらしいもの  
 だろう、人を信じることは尊いものだろう、  
 力強い気持ちにさせてくれた一冊でした。  
 しかし、●●君のお父さんの話を聞いた後  
 では、「この小説っていったい……」と、数

日前に『走れメロス』に感動した自分が、な  
んだかむなく思えてしまいました。  
天井を見上げると、●●君のお父さんの顔  
が浮かびました。いろいろな思い出が頭の中  
を駆けめぐりました。  
●●君のお父さんはとてもいい人でした。  
地元商店街の野球チームでピッチャーをして  
いることもあり、カーブのやシュートの投げ  
方を教えてくれたこともありました。  
子どものころからプラモデルが趣味だった  
ということで、接着剤でくっつけただけのわ  
たしのプラモデルに何回も何回も色を重ねて  
塗ってくれたこともありました。色を塗られ  
たプラモデルはまるで本物のようになりまし  
た。そのプラモデルは今でも宝物です。  
どうしてあんなに優しかった●●君のお父  
さんが、土地と家を取り上げられなければな  
らないのでしうか？ 夕食後、このやるせ  
ない気持ちを父に話しました。  
「でも、これは現実なんだ。現実には現実とし

て受け止めないといけない、そんな年齢にお  
 まえもなったんだろぅね」  
 そう答えてくれました。  
 「でも、『走れメロス』では、……」  
 と言うと、  
 「小説は小説なんだ。もしかしたら、『走れ  
 メロス』は、友情のすばらしさとか、人を信  
 じる尊さとかの話ではないのかも、しれないね  
 友情はこうあるべきだ、人を信じれば報われ  
 るんだという願望が小説という形になったの  
 かもしれない。中学生のときに読んだきりだ  
 から、きちんとした答えになっているかどう  
 か分からないけど……」  
 と、それが父の答えでした。  
 父の言うことが正しいのかどうなのか、わ  
 たしには分かりません。人を信じるとはどう  
 いうことなのか、自分でも一生懸命考えてみ  
 ました。でも、答えは見つかりませんでした。  
 しかし「小説は小説なんだ」の、父の言葉  
 がずっと耳に残っています。